2021 年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

研究課題	**戦前期の「職業体験実習(インターン)」に関する一考察－「実習報文」から見た制度の沿革と歴史的意義－**
キーワード	①職業体験実習、②インターンシップ、③実習報文

研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏　名	イノウエ　トシタカ 井上　敏孝
配付時の所属先・職位等 （令和３年４月１日現在）	常磐会学園大学　専任講師
現在の所属先・職位等 （令和４年７月１日現在）	常磐会学園大学　専任講師
プロフィール	1984 年に神戸で生まれ、その後、 2003 年、奈良大学文学部史学科に入学し、卒業後、 2007 年、兵庫教育大学大学院(修士課程)に進学、 戦前の台湾の港湾建設に関する研究を行い、修了後、 2009 年、兵庫教育大学大学院(博士課程)に進学、研究活動の傍ら、 兵庫県内の中学校と高等学校において教育活動に携わる。 2012 年、同大学院で博士号(学校教育学)を取得。 その後、教育研究活動の傍ら、 2012 年から約 5 年間にわたって、有馬ロイヤルゴルフクラブでのコース管理業務に従事。そして、兵庫教育大学(現在に至る)及び姫路大学等での非常勤講師等を兼ねつつ、 2017 年から 2 年間にわたる ECC 国際外語専門学校での専任教諭等の経験を経て、 2019 年から大阪の常磐会学園大学専任講師として、 保育士・幼稚園・小学校・中学校の教員養成に携わり現在に至る。

1. 研究の概要

本研究は戦前の日本で実施された職業体験実習に着目することで、現在のインターンシップの知られざる歴史を紐解くとともに、その歴史的・教育的意義について解明することを試みたものである。

本研究では先行研究の成果と課題を整理したうえで、一次資料を丁寧に分析するという実証的な研究手法を採用した。ここで明らかになった成果は従来のインターンシップ史、さらには教育史や日本近代史の穴を埋める研究の一端となると考えられる。

2. 研究の動機、目的

本研究は戦前の日本で実施された「職業体験実習(インターン)」の概要について考察するとともに、学生が行った実習の実態と歴史的意義を解明することを目的とした。

従来の研究成果と課題を踏まえつつ、本研究で再検討を試みたい点は次の 2 点である。

1 点目は、現在のインターンシップ制度の原型が形成された時期と場所について確定すること。

2 点目は日本におけるインターンシップが開始された時期を明確化するとともに、戦前期に

行われていた「職業体験実習」の意義と歴史的な位置づけを明らかにすること。

1 点目に関して、これまでインターンシップ制度の源流はアメリカのシンシナティ大学の学長であったヘルマン・シュナイダーが 1906 年に提唱・導入した Cooperative Education にあるとされてきた。

しかしながら大学等に所属する学生が、企業を始めとした学校外の場所で一定期間実務を経験するという試みは 1906 年のアメリカの事例より 30 年余り以前に日本で実施されていた。具体的には 1879 年から日本では旧帝国大学を始めとした高等教育機関に所属する学生が長期休暇中に、鉱山や精錬工場において職業体験を目的とした実習を継続的に実施していた。

これらのことからインターンシップについて世界初の事例とされていたアメリカの事例以前に日本では職業体験実習と称した現在のインターン制度の源流となる制度が確立されていたと指摘することができる。この点を指摘した研究はこれまでなされていない。したがって本研究では以上の点について戦前の職業体験実習を巡る史資料分析を通して実証的に解明したいと考えた。

2 点目に関して、これまで日本におけるインターンシップの本格的な導入・普及は 1997 年の「経済構造の変革と創造のための行動計画」に始まるとされてきた。そして文部省・通商産業省・労働省の三省合同による「インターンシップ推進にあたっての基本的考え方」が公表され、ここでインターンシップを「学生が、在学中に自らの専攻、将来のキャリアに関連した就業体験を行うこと」と定義づけられたことで、キャリア教育の一環としても、インターンシップが推進されるようになったとされる。

しかしその一方で戦前の医学部の学生が行っていた臨床実習や臨床研修が戦前期のインターン制度の一部であったとする記述や戦前の職業学校で実施された産学連携教育の取り組みを取り上げ、インターンが「実は日本でも戦前には行われていた」という指摘がある。これらのことから、日本におけるインターン制度の導入時期や黎明期に関する記述はあいまいな表現がなされており、実証的に明らかにされているとはいいがたい。

したがって本研究において日本におけるインターンシップの導入期及び歴史的な位置づけについて明確にする必要があると考える。

以上の 2 点について、本研究では先行研究の成果と課題を整理したうえで、一次資料を丁寧に分析することで、実証的な解明を試みる。そして明らかになった成果が従来のインターンシップ史、さらには教育史や日本近代史の穴を埋める研究の一端となることを目指す。

3. 研究の結果

(1)本研究で明らかにできた点

本研究課題では戦前の日本で実施されていた職業体験実習について着目し、その歴史的意義について明らかにしてきた。

ここで明らかにできた点は大きく分けて次の 4 点である。

まず 1 点目はインターンシップについて世界初の事例とされていたアメリカの事例以前に日本では職業体験実習と称した現在のインターン制度の源流となる制度が確立されていたと指摘することができた点である。

2 点目は同制度によって実施された実習は、50 年余りにわたって継続し、実施場所は、戦前の大日本帝国各地に及んでおり、系統的・横断的に実施されたものであった点である。

3 点目は、以上の点を指摘した研究がこれまでなされていないことから、本研究の成果は、従来のインターンシップ史、さらには教育史や日本近代史の穴を埋める研究の一端となると考える点である。

4 点目は、職業体験実習に関する史料収集及び分析を通して、戦前の日本外地とされた場所やタイにおける職業実習生の活動が、当該地域の社会・経済建設にどのような影響を与えたのかという点について分析することが出来た点である。明らかになった点について本研究課題から派生した研究として論文を作成、学会誌への掲載が実現した。

しかしながら本稿では解明できなかった点も少なくない。今後の課題としては以下の 2 点が挙げられる。

まず2,000冊あまりの「実習報文」について、すべての記述を閲覧・分析するに至っていない点である。さらに各実習で培った経験が、参加学生のキャリア選択や進路状況に長期的にいかなる効果を発揮したのか否かということについて、データとして明確に解明するには至らなかった点である。

以上の点については、今後、「実習報文」の記述内容の、さらなる閲覧と記述内容の分析を進めるための系統的な調査・分析が必要と考える。

(2)主な発表(予定)論文等

①井上敏孝「台湾拓殖株式会社によるタイでの綿花栽培事業について」『タイ国情報』56巻2号、pp.95-106

②井上敏孝「壺蘆島における近代的港湾の建設計画」『東洋史訪』第29号、pp.28-43

③井上敏孝「戦前期の「職業体験実習(インターン)」に関する一考察」の論文を『インターンシップ研究年報』第25号に投稿予定。

4. 研究者としてのこれからの展望

研究実施者は、今後、戦前のアジア地域におけるインフラ建設や、そこで用いられた技術の伝播や技術者の育成を始めとした、いまだ解明されていない人的・物的ネットワークの知られざる歴史について体系的に明らかにすることを目指している。

そのために戦前のアジア各地で実施されたインフラ事業や人勢育成事業を明らかにする際に日本内地と台湾・朝鮮・満州・南洋等を含めた外地、いわゆる大日本帝国下をフィールドに比較分析するとの視点は欠かすことができないと考える。したがって、本研究で明らかにできた点を踏まえつつ、今後も研究を継続・発展したい。

5. 支援者（寄付企業等や社会一般）等へのメッセージ

研究実施者は、本研究助成を得るまで、研究室を得て間もなく、研究資金が不足しておりました。しかし本研究助成を得たことで、研究課題に関する研究のスピードを加速し、令和3年度中に研究の成果をまとめ、当該研究の学会に投稿する論文を完成するに至りました。さらには、本研究の途上で新たに発見した研究課題についてまとめ、新たに2本の論文として作成し、学術誌に掲載される機会を得ることが出来ました。

このような機会を頂いた支援者の皆さまにこの場を借りまして厚く御礼申し上げます。そして頂いた機会と研究の蓄積を糧に、さらなる研究・教育活動の推進と、当該研究の深化・発展に貢献できれば、ひいては研究の成果を公表することで、社会の発展に微力ながら貢献できることを切に願っております。